

☆練馬区議会議長賞

『明日へのバトン』

練馬区立石神井東中学校 三学年 奥谷 駿也

僕は中学サッカー部に所属し、ミッドフィールダーとして日々を過ごしていました。運動量の多いポジションで、攻守の要としてゲームを組み立て、試合の流れを左右する重要な役割。暑い日も寒い日も仲間たちとボールを追いかけ、中学三年生最後の大会では、地区大会を勝ち抜き支部大会の二回戦まで進むことができました。惜しくもそこで敗れ、中学サッカー部を引退しました。

幼い頃の僕は体が弱く発熱すると高熱を出して痙攣を起こすことが多く、救急車で病院に運ばれることも頻繁にありました。外で遊んで怪我をしたら腕を骨折した経験もありました。病院での治療が日常の一部になっていた僕は心のどこかで「経済的に負担をかけてしまっている」と感じていました。中学三年生になり、公民の授業で社会の仕組みを学ぶ中で私は自分が受けた支援の正体を知りました。日本には、子どもの医療費の窓口負担を軽減する制度があり両親は多額の治療

費を心配することなく僕を病院に連れて行くことができていたのです。この医療保障制度は、国民一人ひとりが納める税金によって支えられていることを授業や両親との会話からで知りました。僕にとって、これは単なるお金のやり取りではありません。見知らぬ誰かが誰かのために繋いでくれる「バトン」だと思いました。

税金は、僕達の生活の様々な場面で使われています。公共施設の整備、警察や消防、教育といった公共サービスの維持、そして国を守る国防にも充てられています。もちろん、僕が幼少期に助けられた医療給付もその一つです。これらはすべて、僕達が安心して安全に暮らせる社会を築くために不可欠なもの。これらの公共サービスは、納税者一人ひとりの貢献によって成り立っているのです。税金は、単に日本という国を維持するためのお金ではありません。国民が互いに助け合い、困難な状況にある人々に手を差し伸べ、国民

の暮らしを支えるための仕組み。僕の幼い頃の経験はこの社会保障制度の温かさを身をもって教えてくれました。

僕はいつか社会に出て働き、納税者になります。その時、僕が納める税金は僕や日本国民一人ひとりの生活に密接に関わってくる。納税は、国民一人ひとりが人間らしく安心して笑顔で暮らせる社会を創り、次の世代へと手渡す未来への希望をつなぐ「バトン」です。この大切な仕組は、日本の未来を支えるために滞ることなく常に活用される大切な循環なのです。

今、僕は一人のサッカー選手として仲間たちとサッカーができる喜びを感じています。それは、見知らぬ誰かの優しさのバトンを受け取ったからこそ。今度は僕がそのバトンを誰かのために渡せるよう、納税できる大人になること。それが、僕の未来への責任でもあります。